

江口隆哉を語る

赤木知雅・池田瑞臣・大芝 信
大野一雄・水田外史・津田史枝（司会）

津田 はじめに高弟の方々から、江口先生との1番の思い出をお話いただけます。

大野 江口先生を知るきっかけは、ドイツから帰られて‘手術室’、髪を断髪にした宮先生と踊ったデュエット‘金と銀’人間を語る‘男と女’。それより何より気になったのは手術室。人間の身体をナイフで切り裂く訳です。語ることでできない、語ることができないから何も内容がないかとなると、本人にとっては人生のすべてを賭けて手術室という問題と取り組んだ。日本での恐らく抽象的な踊りの、最初の時でないかと、私はそう思っている。見たのではなく写真と広告の紹介文を見た。それでコレダ！私の探していたものが。そこでようやく見つかったような感じが文句なしにあった。ドラマティックな演劇とか踊りとかってのは、いやというほど見ている。日常生活と密着している、人間とばかり密着しているのでなくして、例えば、鶴が歩いている、それを見た時にネ、いつの間にか鶴の足取りのようになって1歩1歩、歩いて行った。それからくちばしを伸ばした。鶴を見ていると、見ている自分がいつの間にか鶴のような動きの中で見ている。見ることと恋することとは同じことではないかと、心の中で。アルヘンチーナを見た時大きな示唆を受けましたけど、その次に受けたのは手術室。抽象的なもの、これだなと思って。12月31日、突然先生を訪ね、尋ねられたことは覚えていないけど、ストーヴの回りで即興を10分か20分、音楽なしでやらされ、それでよろしい、と言われた。ドイツに行かれた時、M. ウィグマンに“貴方は、今から即興をやして下さい”と同じことを、江口先生は私に。

大芝 昭和12年、当時は自由に芸術活動のできる時ではなかった。江口先生の芸術的公演は帝劇での何日かの公演と、紀元2600年記念公演。あとは軍歌々々。先生も好き好んでではなく、愛国行進曲、太平洋行進曲、麦と兵隊など。歌舞伎座、東劇、新橋演舞場、甲子園球場特設グラウンドなど。生きているお客さんの前で踊る、これは人生において、舞踊を含めて勉強になった。

水田 先ずことばありきでなく、先ずおこないありき。ことばを離れて舞台はどうやって存在できるのだろう、と悩んでいた頃、江口先生が八田元夫演劇研究所のパンフレットに書かれているのを読んで、元旦に入門。3ヶ月歩くことに専心。歩

け。大きく歩く、小さく歩く、弾んで歩くなど、淡々と歩くことを繰り返すことの根気と、それが身体の中を沁み透ってくることの大事さというものを教えてくれた。

池田 印象的記憶2つ。初めてのリサイタル終わって数日後、先生から電話があった。“とてもよかったよ、池田さんらしくて。池田さんじゃなければできない作品だった。創作っていうものは人の真似をしてはいけないんだよ。自分のものをつくることを考えなきゃいけない。あの作品は誰にもできない作品なんだから、とてもよかった”。代稽古の大野先生を江口先生と思い込んでいたが、地方公演から帰られた江口先生が現れ、稽古場の額とよく似た顔の長い人の出現に戸惑っていた時、“何をみてる？ボクをみているの！あ～ココが長いってことをみている…これは私の特徴でネ、誰も真似のできないもんだヨ…私の芸術はココから出ているんだからネ”。

赤木 ‘月曜会（様々な流派の舞踊家が毎週月曜日に研究所で開いていた創作についての勉強会）’で先生を身近に。舞台監督の立場上、舞台の裏での交わり。芸術家江口隆哉との交流というより息子の名前に隆（たかし）をいただき、私や家族にとってはオヤジ的存在。

津田 稽古場の話から掘っていただければと思います。「バー・レッスンやパの練習でないモダンダンスの基本の幾種類かをやって、こんどはその基本を変化発展させたものを刻々に生み出しながら指導するのが、モダンダンスの基本運動練習だが、その運動の中に運動としてもやり甲斐のあるいわゆるおもしろい動きが出てくると、稽古している人たちの瞳が一斉に輝き、一種の熱気を帯びてくる。そういう時、我が意を得たりという喜色を大きく現すのが正田千鶴さんで、数日前の稽古の時、断続的なリズムの風変わりな動きが出たので“正田さん好みの動きだね”と言ったら、正田さんはキャーッと大声をあげて笑い出した。図星を指されて憎たらしく思ったらしい。…」これが江口先生の稽古場風景をお書きになっている部分です。それから牧野京子さんの書かれているものですが、「…普通はピアノの伴奏か打楽器づきで、広い稽古場に3列、多い時には50人位が隊列をつくって歩きながら動いてゆく。鏡がなかっ

た。先生の言葉を自分の体に課してゆく。自分の格好が無様であろうとなかろうと丹念にやっていると、“そうだ！”と言われる。身体の中の意識や知覚が鮮明になってゆく感じを得る。‘へんな格好を正しくやれば、良い動きになるのだ！’。それでは、作品とか技術のあたりから、どなたか、おねがいます。

水田 私の人形の中で江口さんが触られた唯一の人形なのですが…。人形を動かすことに専念していたが、行き詰まって困って、‘先生ならこれ(面)をどう動かしますか？’“う～ん、これは…”と言いながら人形の頭を下に向けられた。この逆の在り方は、私にとっては死を意味していたので、驚いた。命が宿る人形の生と死の隙間を何気なく示された。この驚きと人形の動きのダイナミックさを教わったことは、忘れられない。

大芝 戦前、江口先生は教えるということの意志は全くなかった。戦後、『現代舞踊(月刊誌)』をはじめたり、学校教育に従事するようになってから、改めて、若い人達に教えることに熱意をもってなされたんですけども、しかし、決して先生の腹の中には、後継者の育成という考えはなかったと思います。これはまたあったらおかしいと思うので、江口隆哉の後継者など、ありっこないのです。若い人を教育してモダンダンスの道を拓げるということに重きを置いていたのでは。

赤木 私が先生の側にいつてからというのは、大体先生が丁度50代の後半から60代にかけての頃ですが、その頃の先生というのは‘月曜会’の創作についても教えることはなかった。“自分は会場提供の家主であって、創作への火付け役なんだ。勉強するのは、お前さん達なんだ”とよくおっしゃっていました。1950年代終わりから60年代にかけて、リサイタル、グループ公演(7人の会、北斗の会)などで、多くの若手を世に送り出した。この功績というのは、僕は当時は判らなかつたのですが、今、自分がその年代になってみて、大変なことを先生してたんだな、と。ご自分の活動もさることながら、自分のところに集まってくる若手の人達をまとめて世に送り出し、非常に細かい神経をもっていらして、例えば、リサイタルが何か判らないでやってらした人が多かつたのですが、そうしますと当日の支払いもどうやっていいか判らない。先生は必ずご自分で当日の会場費やスタッフの費用など支払い経費を持参してきました。

池田 今度は稽古の事に入りますけれど、稽古場では先生が踊ったのを皆が列になって踊っていくんです。僕は最初に入った頃は一番ビリだもんですから、30人か40人の後だったかしらネ、だから1回目の人から最後になってくると落語であったように、変わってきているんです。でも先輩のやっているとおりやってた訳です。ですからその時

から目でみる勉強というのをやってた。数で合わせて形に入るのでなくて、先輩のをみながら合わせていくことをやりました。だから数からではなく、心の方から入ってゆきまして表現して、音との調和によってその動きがば～んと映えるという教育で習ってきました。それから稽古の時、先生は地方の名前で呼ぶんですよ。池田でなく大畑、大畑(出身地)で注意されていました。余所の方はお～い長野、松本なんてやる。そ～するとやってる方の動きがとっても違うんですよ。あ～土地柄でこういう踊りや踊り手が出てくるんかと、踊りの原点ってのは故郷を無視しちゃいけないんだって感じが無意識にあったんです。そうやっているうちに、先生の呼吸の仕方とかかみているうちに鈍角的な動き、伸びる前の鈍角の中で何かを、ものを考えるそして出発する。そうしたことを先生の動きの中で考えた。

津田 先生のダンサーとしての忘れられない思い出などを、どなたか。

大芝 宮操子という人はモダンダンサーとして天才だったが、江口隆哉という人は器用な人とは言えないと思います。レンガを1つ1つ積み重ねて壮大な建物を造ってしまうタイプの人だと思います。

津田 大野さんは先生のお若い頃の動きなど、生活を共にされていてご存知のことなど、何か。

大野 戦前戦後美術学校の講師をお呼びして、話を聞く機会が多かつた。その時の話のうち私の頭の中に残っているのは、関節の話。肉体と関節が結びついて動きが成立するんだろうと思いますけど、その関節の動きだけでなくさらに肉体がくっついてですね、精神がくっついて…そうなる動きは無限にある訳ですよ。そういうことについてどれくらいあるか、計算してみたらなんて話も言ってますね。計算したことは聞いてませんが。最初に先生から聞いた、肉体とは何か、命とは何か、話が展開すればいいけど限界がないから、研究生が沢山おるなかだから、残っているのは関節の話。人が真ん前から現れてくる。斜めはどうか、沢山の人がいる場合など構成の話、展開の話、人間が生きていく上での人としての関係の中での大切なこと。下がる、さがる、これだけでも稽古やろうと思うとできる訳です。歩くこと、それに手をつけたり、首の動きをつけたり、色々こうしたら、それだけでも無限にある。ちょっと曲げる、ウント曲げる、背中まで曲げる、大地につくまで曲げる。こういうような動きをず～と繰り返してやる。いろんな動きを加えると動きは無限に限りなくできる。さてそういう時に、こんど心の問題、魂、命の問題ってやつはどうなるんだ。何か必要があるからそっちに行くんだ。先ず、行くという思いが先行して足がついてゆく訳。肉体を主にしてやった時どうなるんだろう、という問題を

はらみながら、そういうことを最初の半年間ひたすら教わった。そして5年間びっしりやった訳です。江口の稽古場ではとことんまでいった。動き製造株式会社でなく必死になってやった。よくいやにならなくてやったなあ。そこから、宇宙論的世界への出発となった。

津田 予定時間が過ぎてしまいましたが、これで、「江口隆哉を語る」を終わらせていただきます。(紙面の関係上1部割愛しました。

文責・津田史枝)

*1993年度春季第35回舞踊学会
『舞踊學』17号より転載